2024年 第49回

視点

全国公募写真展

写真一出会いの喜び、無二の記録

写真はいずれも2023年「視点」の入選・入賞作品です

個性豊かな写真を募ります

一人で何点でも応募できます

作品募集

テーマ、内容は自由

単写真または最大8枚までの組写真
（ヤング部門は5枚以下）
写真サイズA4または六切のプリント
応募資格にいっさいの制限はありません

送付受付 2月1日(木)～3月1日(金)

展示：東京都美術館（上野公園内）

会期：6月6日(木)～6月13日(木)

巡回展：関西、仙台、三重

全入選作品を収録した写真集「視点」を同時刊行

奨励賞「車窓　鶴見線」(4枚組) 熊谷 一之

視点賞「大和古事記風土記」(6枚組) 豆塚 猛

「若者達と自慢の愛車」(単) 岡田 長逸

「視点」各賞 ヤング部門あります

視点賞	1名	土門拳揮毫「視点」額（賞状と賞金 30万円）
奨励賞	3名	（賞状と賞金 10万円）
優秀賞	7名	（賞状と賞金 3万円）
特　選	10名	（賞状と賞金 1万円）
ヤング賞	1名	（賞状と賞金 5万円）
準ヤング賞	3名	（賞状と賞金 1万円）
入　選		（賞状と写真集「視点」）

主催 日本リアリズム写真集団(JRP)／2024「視点」委員会

〒160-0004　東京都新宿区四谷3-12沢登ビル6F　https://www.jrp.gr.jp　Email：jrp@jrp.gr.jp

問い合わせ先（13:00～18:00）TEL：03-3355-1461　FAX：03-3355-1462

ヤング賞「最後の一滴まで」(単)
小泉 志穂

「廃線を乗り越えた只見線」(6枚組) 鮎瀬 正

「穏やかな日常 ウクライナ2009年」(4枚組) 篠田 明美

「誕生」(3枚組)
山口 ヒロナリ

第49回 視点 選考委員

榎並悦子（えなみ えつこ）

大阪芸大学卒業後、岩宮武二写真事務所を経てフリー。主な作品に、高齢化率日本一の町を取材した「日本一の長寿郷」、インドのアパタニ民族を取材した「APATANI STYLE」などがある。写真集『Little People』で第37回講談社出版文化賞写真賞受賞。全日本写真連盟副会長。日本写真家協会正会員。

数ある全国公募写真展の中でも「視点」はハードルが高い、という声を耳にします。確かに過去の受賞作は社会性を持った眼差しでとらえたもの、とりわけ組写真の完成度は高く、難しそうに思われるかもしれません。しかし、気負うことなく、日常の中で「いいな」と思われた写真をどしどしご応募いただければと思います。心が温まるハートフルな作品を期待しております。

清水哲朗（しみず てつろう）

1975年横浜市生まれ。日本写真芸術専門学校卒業後、写真家竹内敏信の助手を3年間務め、23歳でフリーランスに。独自の視点で国内外の自然風景からスナップ、ドキュメントまで幅広く撮影している。第1回名取洋之助写真賞、2014日本写真協会賞新人賞、2016さがみはら写真新人奨励賞。日本写真家協会会員。

歴史ある『視点』の選考委員を拝命され、背筋が伸びる思いです。1億総カメラマンとも言われる時代では日々たくさんの写真が量産されていますが、100年後も残る写真はどれだけあるでしょうか。これまで『視点』に入選入賞した作品を見返すとどれもその価値があるほど力強く、世の中の出来事を鋭い眼で切り取っています。今回の審査ではどのような内容の傑作が応募されるのか、考えるだけで期待が膨らみます。

中村梧郎（なかむら ごろう）

フォトジャーナリスト。ベトナム戦争・枯葉剤を追及。元岐阜大学教授。著書『新版・母は枯葉剤を浴びた』(岩波現代文庫)。『戦場の枯葉剤』(岩波書店)。83年ニコン伊奈信男賞。05年科学JASTJ賞。07年NYでマグナム60周年招待作品展。JCJ代表委員。JPS会友。JRP代表理事。

美しさや可愛さ、哀しさや奇妙な光景、空間にそんなフォルムを見出したとき、私たちは“あ”と思います。それを画像として取り込めてしまうのが写真です。その感覚を上手に再現できれば他の人に感動が伝わります。主題はいつでもどこにでも転がっています。「写真で表現する」のは楽しくクリエイティブな仕事です。チャレンジしてみてください。視点展は全国公募です。個性的でユニークな作品をぜひ見せていただきたいと思っています。

英伸三（はなぶさ しんぞう）

1936年千葉市生まれ。農村問題などを通して日本社会の姿を追い続け、1992年から中国の改革開放政策による変貌を追っている。伊奈信男賞など受賞。写真集『一所懸命の時代』など多数。JPS会員、JRP代表理事。現代写真研究所所長。

吸い込まれるような美しい写真、被写体が迫ってくる力強い写真、巧みな表現で主題を語る写真、一展示会場で、写真の前で長く立ちつくす写真がある。それは撮影者が撮らずにはいられなかった、写真らしい写真。出会いを大切にして、そこから何かを学びとろうと、被写体と対峙した写真である。眺めていると画面からその場の状況がいろいろ伝わってきて納得する。こんな写真をたくさん見せてほしいです。

足立君江（あだち きみえ）

1980年代から安曇野、2000年より内戦後のカンボジアを取材する。内戦により荒廃した村や家族を訪ねて取材。写真集『哇爍爍』、『安曇野歩歩記』、『カンボジア働く子どもたち』、『カンボジア子どもたちの肖像』、『里の民』を出版。2018年笹本恒子写真賞受賞。JPS会員、JRP代表理事、現研講師。

原点に戻り写真は撮り続けることが大切だと思う。撮って、撮りまくることで何かが見えてくる。それがすぐ作品になるかと言うとそういうものではない。見方を変えることで新たなテーマも生まれ、気づきを追求し、深い発想と見せ方で作品ができます。組み写真に挑戦する事もお勧めです。SNSで写真が氾濫し、AIで合成が簡単にできる時代ですが、丁寧にシャッターを押し、日常をリアルに表現する事に注目をしたいと思う。懸命に撮ってきた作品はひとつも見逃しはできない、視点の選考委員としてのチャレンジです。

金瀬胖（かなせ ゆたか）

1944年千葉市生まれ。主な関心事は社会の風景と音楽家。写真集『ZONE』、『EXPOSED 東海村感光録』、『浦廻』、『路上の伝記』『Nostalgia』ほか。写真展多数。写真の会賞など受賞。JPS会員、JRP代表理事。現代写真研究所教務主任。2024「視点」委員長。

子どものころ写真は遊びだった。日光写真、ピンホール写真、炬燵の中の幻灯機。何を写すか考え、どう写るか見るのが楽しかった。大人になって撮る写真は楽しいものもあったが、大方はシリアスなものだった。この数年、写真が洪水のように溢れ生活を浸し、文明が野蛮化し文化の基底にある写真が溶けてしまっているように思い、写真を取り戻さなければと思っている。今は、音楽や路上スナップ。何故か。音楽は文字通り「楽」で楽しいし、スナップは見慣れた所に素晴らしい人間の街のドラマが在ることを教えてくれる。勇気をもって応募してほしい。写真はそれを見る人が見たときはじめて写真になる。